

Alexander J. Fisher,

Music and Religious Identity in Counter-Reformation Augsburg, 1580-1630

林 良 彦

ドイツ近世史、特に一五五五年のアウクスブルク宗教和議後の宗派並存期は、「社会的規律化」「宗派体制化」の概念を用いて考察されてきた。この概念によれば、近世の各領邦や帝国都市は、教会組織を自らの政治的従属下に組み込むことで領邦教会制を整える一方、住民に対しては公私を問わず社会のあらゆる領域において宗派の教義や倫理的規範を遵守することを要求したとされる。このような規律化の動きが、領邦君主や都市参事会など「上からの」圧力から生じたのか、あるいは都市中下層民や農民といった「下からの」自発的な意思に基づいていたのかについては、活発に議論がなされている。また、社会の諸側面における「宗派間の対立と共存のあり方も」、研究者の関心を集めている。本書の対象でもある帝国都市アウクスブルクにおける宗派の並存体制を論じた永田諒一氏によれば、異なる宗派の住民は常に対立関係にあってたわけではなく、歩み寄りや協調の局面も多く見られたという。

このような概念設定に加え、近年では民衆文化や儀礼行為に対する関心の高まりによって、都市民の音楽活動からこの時代を考

察する試みが盛んに行われている。もとより、宗教改革を受容した領邦・帝国都市による典礼改革は、重要な研究対象であった。また、八〇年代以降のスクリブナーやエッティンガーは、文字の読めない民衆に対する宗教改革理念の普及に賛美歌や俗謡が果たした役割を高く評価している。これらの研究の延長線上に位置する本書では、対抗宗教改革期アウクスブルクの音楽文化が論じられている。著者であるフィッシャー氏は、現在カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の音楽院において音楽学の助教授を務めている。著者が二〇〇一年にハーバード大学に提出した博士論文に基づいて執筆された本書で扱われるのは、一五八四年の改暦紛争から、三十年戦争において皇帝軍とスウェーデン軍との戦闘に都市が巻き込まれる一六三〇年代までである。音楽史の区分では後期ルネサンスから初期バロック時代にあたるこの約五〇年間で、著者は音楽活動に宗派体制化の影響が色濃く表れる時期として捉えている。

まずは本書の章立てを示し、内容を概観したい。

- Chapter 1 : Music and religious identity in a divider city
- Chapter 2 : Protestant song and Criminality
- Chapter 3 : Musical life and Lutheranism at St Anna
- Chapter 4 : The Counter-Reformation and the Catholic liturgy
- Chapter 5 : Devotional music in Counter-Reformation Augsburg
- Chapter 6 : So vil choras muscorum : music in Catholic processions

Chapter 7: The Holy Mountain in Catholic pilgrimage

Chapter 8: Music, confession, and the disaster of Thirty Years' War

第一章で著者は、アウクスブルクの音楽文化はカトリックとプロテスタントの双方の宗派体制化をどのように反映し、同時に宗派意識の形成にどのような役割を果たしたのか、と問いかける。

アウクスブルクでは、音楽を用いた都市民の教化に教会上層部が苦心する反面、都市民の歌う歌からは、彼らが宗派意識を鮮明にした音楽表現に関心を持っていたことが明らかとなる。したがって、音楽は宗派体制化の動向と密接に関わっている。この結びつきはカトリック側により顕著にみられるが、これまでの音楽史研究は宗教改革におけるルター派の賛美歌の「進歩性」を強調する一方で、対抗宗教改革期のカトリック音楽を軽視してきた。著者はこのように研究史を批判し、カトリック音楽の再評価を試みる。だが、多様な要素を含むカトリック音楽を理解するためには、従来の音楽研究において主要な研究対象であった作曲技法に關してだけでなく、教会やパトロンの側の宗教的動機、カトリック音楽に要求される演奏形式、作曲家個人の信仰心、典礼のみならず行列や巡礼における宗教音楽の性質、ポリフォニーとモノフォニーとの関係、諸宗派の関係が演奏に及ぼす影響といった点をも問題にしなければならないと著者は主張する。以上の問題設定に基づき、第二章以降ではプロテスタントとカトリックの両宗派の音楽活動が、当時の社会的背景の中で捉えなおされていく。

第二章では、アウクスブルク市参事会による審問記録 *Urgichten*

sammlung を分析することで、市参事会やカトリック教会に対する不満を歌によって表現したプロテスタント住民の宗派意識と、彼らの歌に対して市参事会が試みた言論統制とが併せて論じられている。この史料の中で特に著者が重視するのは、プロテスタントの住民に宗派意識を高めさせる契機となった二つの事件である。一つ目の事件は、一五八四年に起きた改暦紛争と、それに伴う説教師ミュラーの追放である。教皇の提唱によって行われたユリウス暦からグレゴリウス暦への改暦は、純粹に実務的な理由に基づくものであったにもかかわらず、プロテスタント住民は、この改暦をカトリック門閥が優勢を占める市参事会や教皇庁による抑圧と見なした。この改暦紛争を扱った審問記録からは、都市民たちが歌によって改暦に対する不満を表明していたこと、更には歌を媒介としてウルムやメミンゲンなどの他都市ともつながりを持っていたことが明らかとなる。特に、アブラハム・シュートリンの事例は、歌の作曲過程や伝播を考える上で重要である。彼が「神がアウクスブルクにおわしまさねば」を作曲した際に本歌として参考にしたユストウス・ヨナスの曲は、キリスト教徒（プロテスタント）対異端（カトリック）という構造を持っており、プロテスタントの宗派意識を鮮明に表している。シェートリンはヨナスの旋律を借り、歌詞を改暦紛争とミュラーの追放というアウクスブルクの時事問題に置きかえることで、カトリックに対する抵抗を行なったのである。さらに彼の歌は、歌われ、印刷され、書き写されることで様々な教養層の人々に流布していった。二つ目の事件であるカトリック財産の返還を命じた一六二九年の復旧勅令の際にも同様の事例は散見される。皇帝とアウクスブルク司教に

よる圧力に対し、プロテスタント住民の不満は再び高まる。教会での典礼を制限された彼らは、賛美歌を改変しカトリックを批判する歌を歌った。以上の事例からうかがえるように、プロテスタント住民は、既存の広く流布した歌を利用することで市参事会に対する不満を表明した。これらの歌は、行列や巡礼の音楽に対するカトリック住民の関心の増大とも対応しており、一五八〇年以降のアウクスブルクにおける両宗派の宗派意識の高揚を示している。一方、市参事会はこれらの歌を都市の平和を乱すものとして取り締まったものの、流布を完全に阻止するのは不可能であった。さらに、住民の多数を占めるプロテスタント住民を刺激することへの恐れから、歌を広めた者を厳しく罰することもできなかったという。歌を媒介とするコミュニケーションの多様性を証明した本章は、審問記録の綿密な調査という点において、注目に値する。しかし、経済的に困窮した中下層手工業者のフラストレーションを、改暦紛争の直接的な原因とするのはいささか短絡的であり、これについては更なる検討が必要であろう。

第三章では、アウクスブルクにおけるプロテスタントの拠点であった聖アンナ教会の聖歌隊長アダム・グンベルツハイマーの活動を検討することで、教会音楽と宗派との関係を論じている。グンベルツハイマーの活動からは、都市内に宗派間の対立を呼び起こす意図は見受けられない。また、彼の作品は教会学校の生徒や聖歌隊員の教育を主目的としているが、この中にも宗派意識の高揚を促すような曲は含まれていない。加えて、彼の作品にはヴェネツィアの影響を強く受けたカンツォネットやマドリガーレなどの様式がみられるが、この様式はカトリックの作曲家にも受容さ

れていた。さらに、カトリックの宗派意識が強く表れた聖母崇敬などを主題とする楽譜も、彼は教会音楽のレパートリー増加のために収集している。このような態度の背景としては、教会監督権を掌握していた市参事会の意向にグンベルツハイマーが従わざるをえなかったこと、また彼自身がカトリックの教育機関の出身であること、更にはプロテスタントの宗教音楽が持つ保守的性格が挙げられる。その中でも市参事会に雇用された聖歌隊長という立場が彼の活動に与えた影響の大きさを著者は強調する。本章は、プロテスタント住民による音楽活動と対比させることで、教会音楽のエキクメニカルな傾向を鮮やかに浮かび上がらせているだけでなく、プロテスタント教会による音楽を用いた民衆教化の実態をも明らかにしている。

第四章以降では、カトリックの宗教音楽が扱われる。まず第四章では、対抗宗教改革期のカトリックによる音楽活動の活性化が包括的に論じられる。対抗宗教改革を研究する者にとっても、本章は大きな知見が得られるであろう。教会内部に目を向ければ、この時代の典礼は次の三点において大きく変化する。第一に、地方色の強い旧来のアウクスブルク式典礼に換えて教皇庁をモデルとしたローマ式典礼の導入が歴代司教によって試みられたこと。第二に、行列や巡礼に対する関心の高まりに伴う、大聖堂及び聖ウルリヒ・アフラ教会の音楽の充実と、イエズス会による音楽活動の活発化。第三に、カトリックの象徴としての聖母崇敬、聖体崇敬の強化。カトリック教会では、カトリック地域出身の音楽家のみが雇用され、カトリックの宗教音楽だけが収集されるなど、宗派の違いが強く意識されていた。また、典礼に俗語の歌が導入

された後も、カトリック教会におけるラテン語の歌は、宗教改革以前からの伝統の存続を表わすと共に教皇庁との強固な結束の象徴するものとして、特別の地位を占めつづけた。カトリックの施設に雇用されていたベルンハルト・クリンゲンシュタイン、クリスティアン・エババッハ、グレゴール・アイヒンガー、フィリップ・ツインデリンらの作曲活動は、このような典礼の変化を如実に示している。対抗宗教改革を推進する教会関係者や都市門閥がカトリックの宗教音楽に果たしたバトロンとしての役割は非常に大きいものであった。その証拠の一つが、作曲家たちが典礼用の音楽以外にも、都市門閥をはじめとする都市民の信仰心を反映した行列や巡礼の際に歌われる曲を数多く作曲していたことである。そのような宗教行事における音楽全般を扱っているのが第五章である。典礼以外の宗教行事の重要性を著者は指摘するが、それは公式の典礼と都市民の宗教行事とを併せることではじめてカトリックの宗教儀礼を理解できるためである。これらの宗教行事を支援したのは、フッガー家などの都市門閥であった。彼らが「カトリック信者が弾くこと」を条件としてオルガンを教会に寄付している反面、プロテスタントであるハンス・レオ・ハスラーを室内オルガン奏者として雇用しているという事実は、音楽に対するカトリック側のエキクメニカルな態度を表している点で興味深い。フッガー家の後援を受けたイエズス会もまた、マリア信心会を結成し、宗教劇を開催するなど、都市民のカトリック教化のための活動を行っていた。加えて十六世紀末には、イエズス会の支援を受けてカトリック関係の書物を専門に出版する印刷業者も登場しており、カトリックの宗教音楽の出版にとって有利な状況が生ま

れていた。上記の状況のもとで作られた音楽には、作曲家個人よりもバトロンである都市門閥層の嗜好の影響が必然的に強い。一方で歌詞に関しては、対抗宗教改革においてカトリックの象徴として喧伝されていた聖母崇敬、聖体崇敬、キリストの受難といった主題が多く、ラテン語のアクセントを意識した旋律や聞き取りやすさを優先したホモフォニックな構成を備えていた。これらの特徴から、宗教行事のために作られた歌が住民の教化を目的としていたと推論する著者の見解は、十分に説得力を持っている。歌に付随する様々な行為や歌詞の内容が曲と結びつくことによって、カトリックの音楽文化は成り立っていた。「ルネッサンス期の音楽の重要性を理解するためには、ポリフォニー作曲技術の特殊な効果を分析することと同様に、作曲家が置かれていた当時の状況を把握しなければならない」というパーキンスの言葉を引用しながら、カトリックの音楽を理解するためには、歌詞が持つ宗派性や作曲時の環境を考察しなければならないと著者は述べる。

第五章で述べられてきたカトリックの様々な宗教行事のうち、兄弟団や信心会を中心として行われた行列を取り上げているのが第六章である。対抗宗教改革期のアウクスブルクにおいて、行列は参加者の信仰心を充足するだけでなく、都市民の大多数を占めるプロテスタント住民にカトリックの権威をアピールするものでもあった。したがって、行列は信心行為としての宗教的機能と、カトリックのヒエラルキーを確認する政治的機能を併せ持っていたといえる。このような特徴を表しているのが、行列の経路である。十五世紀には教会およびその周囲にとどまっていた行列の経路は、十六世紀末にはプロテスタントの住民が居住する地域にま

で及ぶ大規模なものへと変化していった。聖アンナ教会の牧師メルヒオール・フォルクスは、カトリックの行列を非難し、プロテスタントの住民に行列を見ないよう勧告している。この事例は、行列を巡って両宗派が激しく対立していたことを物語る。カトリックによって盛大に行われた行列は、参加者の歌だけでなく、教会や市参事会に属する楽師の演奏も加わる華やかな音楽行事でもあった。司教や聖堂参事会員の支援を受けて最も大規模に行われたのは聖体拝領の行列であったが、この行列にはトランペット奏者やドラム奏者も参加していた。このことから、行列に軍隊のイメージを付与し、「カトリックの勝利」を都市住民に示そうとする教会上層部の思惑が読みとることができる。プロテスタントが器楽演奏よりも俗語の詩篇や賛美歌を重視したのに対し、カトリックは五感を圧倒するスペクタクルの一部として音楽を位置づけていた。ここに、宗教音楽に対する両宗派の見解の違いがある。第七章では、アウクスブルクにおける巡礼を扱っている。巡礼の母体となっていたのは、兄弟団や信心会であった。したがって、巡礼は教会の管轄からある程度独立した自発的な信仰心の表れであるといえる。だが対抗宗教改革期には、巡礼を民衆教化の手段とみなしたカトリックの論客たちによって、巡礼を教会の統制下に置くことが試みられた。このような巡礼を、著者はカトリックの人々の宗教意識が結晶化したものとして捉えている。巡礼の音楽の核となるラテン語やドイツ語による祈りの歌は、巡礼という行為に適うかたちで、記憶しやすく、人々の歩みに合わせて歌うことができるようになっていた。同時にそれらの歌は、異端との戦いやルターを非難する歌詞を持つことから、対抗宗教改

革のプロバガンダとしての役割も併せ持っていたという。アウクスブルクでは、バイエルンのアンデックスへの巡礼が特に盛んであった。アンデックスへの巡礼熱は、一五七〇年代以降の年代記や会計記録などの詳細な叙述から明らかとなる。この巡礼は、三位一体兄弟団を中心に行われていた。兄弟団の規約には、巡礼の進め方や歌われるべき歌が細かく定められている。また、この兄弟団の会計記録によれば、音楽にかかる費用は巡礼全体の一割程度であった。この支出が高額か否かは定かではないが、巡礼が聖歌隊員や楽師をも動員する音楽行事としての側面を持っていたことを、この史料は示している。第六、七章は、教会宗教と民衆宗教とが混交しあうカトリックの宗教儀礼の姿を明らかにし、そのような儀礼における音楽の重要性に注意を促している点で、本書の核ともいえるべき箇所である。著者は巡礼に対する態度は社会層によって大きく異なることを認めつつも、巡礼を対象とした楽譜の出版には教会上層部の許可が必要であったことなどから、一七世紀前後の巡礼は「上からの」宗派体制化の一環であったと結論する。

最終章となる第八章では、三十年戦争期の両宗派の音楽活動を論じている。一五九一年に改暦紛争の調停がなされて以来、比較的安定状態にあった両宗派の住民の関係は、一六二九年の復旧勅令によって再び緊張する。この勅令を受けてアウクスブルク司教ハインリヒは、聖職者の追放や教会の閉鎖、室内における祈りの制限など、プロテスタントに対して様々な圧力をかけた。これに対し、プロテスタントの住民は、再び歌を抵抗の手段とした。埋葬の際に人々を扇動して歌を歌わせたかどで逮捕されたマットホ

イス・ヴァイスとバルタザール・ハインの事例からは、歌を媒介として結束を強めるプロテスタント住民の姿がうかがえる。逆に一六三二年のスウェーデン軍への降伏から一六三五年の皇帝・バイエルン軍による再占領までは、カトリックが抑圧された期間であった。再占領後に行われた行列は、アウクスブルクの解放とカトリックの勝利を祝うものとして大規模に行われた。このように三十年戦争期には宗派意識を鮮明にした音楽が再び増加する。しかし、一六三〇年代にプロテスタントとカトリックの両勢力によって交互に占領されたアウクスブルクは衰退し、音楽家を多数雇用するだけの経済力を喪失していった。三十年戦争の終結は、音楽による宗派体制化の終焉でもあった。

以上が本書の概要である。結論にあたる部分がないため、評者なりに本書を整理してみたい。プロテスタント側は、教会関係者よりも住民の側に、宗派意識を鮮明にした音楽が多くみられる。これに対し、カトリックの側は、門閥と教会機関とが一体となった大規模な音楽行事を行なうことで、都市内において「上からの」カトリックの復権を試みた。両宗派によって歌われた歌は、十六世紀後半から十七世紀前半にかけて、音楽が宗派意識を形成する上で重要な手段となっていたことを示している。このような宗派意識を表現する曲の歌詞や演奏形態は、十六、七世紀の音楽を考える上で不可欠の要素である。一方で両宗派の音楽は、共にイタリアの影響を強く受けており、作曲技法の点では両者に違いはない。このことが、カトリック・プロテスタント間の音楽家の交流や、両宗派で共に使用される曲などに表れている、音楽特有のエキユメニカルな傾向の背景といえるであろう。

本書の独自性は、二宗派並存体制下のアウクスブルクという時と場所の設定、対抗宗教改革期のカトリックによる音楽活動の重視、そして宗派体制化という歴史学の概念の積極的な応用にある。楽譜の分析だけでなく、審問記録や年代記、兄弟団の規約などの史料を用いて近世都市の音楽文化を多角的に考察することによって、これまで比較的研究が手薄であった対抗宗教改革期のカトリックの音楽文化を詳らかにしている点は、本書の大きな長所として特筆に価する。また音楽史研究にとっては、これまで充分に説明されてこなかった都市中下層民の音楽活動を解明する上で、貴重な示唆を与えてくれる。中でも、プロテスタントの都市民が賛美歌を改変した歌を広めていく過程を論じた第二章は刺激的であった。さらに、カトリックの宗教音楽が教えられていたプロテスタントの教会学校について延べた第三章や、カトリック側がプロテスタント住民の反応をうかがいつつ行列を大規模にし、都市を挙げて巡礼を祝うようになる過程を扱った第六、七章は、カトリックとプロテスタントの両宗派で構成される共同体における相互の対立と共存のあり方を鮮明に提示している。音楽が、宗派の形成に大きく寄与すると同時に、宗派の境界をも容易に越境する性質を持つからこそ、このような分析が可能なのであろう。

だが、いくつかの疑問点や不満な箇所も存在する。第二章で見てきたように、市参事会は都市民に規律を遵守させ、宗教平和を維持する目的から、都市民の歌の統制を試みた。だが同時に、市参事会を構成する都市門閥たちは、自らが信仰する宗派を様々な形で支援していた。このことを考えれば、市参事会の音楽に対する態度と、個々の都市門閥の音楽に対する態度、この両者の関係

についてはもう少し説明があってもよかったのではないか。また、アウクスブルクの都市社会を考える上で「カトリック主導の市参事会」対「プロテスタントの都市民」という構図に著者はとらわれすぎているように思える。言い換えれば、プロテスタント門閥やカトリックの都市民が両宗派の音楽文化にどのように反応したのが、本書では不明瞭になっているといえる。カトリックの宗教音楽を再評価することを主眼とした本書において、プロテスタントの扱いが不十分なことを嘆いても仕方がないのかもしれない。しかし、プロテスタント門閥の音楽との関わり方をカトリック門閥のそれと対比させれば、両宗派の音楽活動がより明確に見えた可能性があるだけに残念である。一方、カトリック側の音楽活動も、整然と捉えすぎているように感じた。著者がいうようにカトリックの宗教行事が「上からの」統制によって秩序だつて行われるものであったとは、必ずしもいえないのではないか。本文中には楽譜がしばしば引用されているが、それらの楽譜を読み、歌うことができたのは、都市門閥などの楽譜を読む知識を持った人々である。楽譜を読むことのできないカトリック住民は、どのように歌に参加したのだろうか。加えて、これらの楽譜が必ずしも譜面のとおりで歌われていたという保証はない点も考慮にいれるべきである。したがってこれらの音楽から、カトリックの音楽をあらゆる人々に対するプロバガンダの機能を持つものとして安直に結論づけることは困難であり、異なる階層ごとによる音楽の「読み」を考えていく必要がある。さらに、宗教音楽に対する著者の定義にもいささか疑問がある。例えば、マイスター・ジンガーの活動を著者は世俗音楽の範疇に含めている。だが評者が調べたとこ

ろでは、彼らはルター訳の聖書を題材とするマイスターリートを数多く作っていた。したがって、マイスター・ジンガーの音楽もまた、宗教音楽に属するものではないだろうか。宗教音楽と世俗音楽の境界は非常に曖昧である。だが、そのような境界上にある音楽を考察することもまた、都市民の信仰を考える上では忘れてはならない。またマイスター・ジンガーの事例からは、プロテスタントの住民が、市参事会に対する反抗を目的とするだけでなく、より穏やかに宗派意識を表す歌を歌う文化を持っていたことを指摘できるであろう。

とはいっても、これらの不満の多くは隘を得て蜀を望む類のものであり、本書が歴史学・音楽学の双方の研究者にとつて大いに刺激となることには変わりない。本書評では十分に触れられなかったが、本書は作品分析や作曲家の評伝としても充実している著者は現在、対抗宗教改革期のミュンヘンにおけるカトリックの信仰と音楽との関係を研究しているようだ。今後の研究の成果にも注目していきたい。

① 下田淳著『ドイツ近世の聖性と権力―民衆・巡礼・宗教運動』二四一―三六頁（青木書店、二〇〇一年）は、本書でも扱われている教会宗教と民衆信仰の関係を、研究史の点から整理している。

② 永田諒一著『ドイツ近世の社会と教会―宗教改革と信仰派対立の時代』（ミネルヴァ書房、二〇〇〇年）。特に二二〇―二三頁はアウクスブルクについて論じており、本書の理解に必須である。

③ 例えば、十六世紀ニュルンベルクの典礼音楽の変化と当時の政治状況との関係を論じた Butler, B. Russell, *Liturgical music in sixteenth-century Nuremberg*, (Diss.), University of Illinois at Urbana-

Champaign, 1970. は、ニールンベルクのルター派教会典礼とカトリックの典礼が類似している原因として、皇帝との関係の維持という外交政策を挙げている。また、渡邊伸氏は、「聖餐式と会衆歌」『ロマンテーションの社会史』（ミネルヴァ書房、二〇〇一年）の中で、宗教改革期シュトラースブルクにおける典礼において俗語の歌の導入が果たした社会的機能の重要性を指摘している。

④ Scribner, R.W., *Popular Culture and Popular Movements in Reformation Germany*, London, 1987; Oettinger, R. Wagner, *Music as Propaganda in the German Reformation*, Aldershot, 2001.

(St. Andrews Studies in Reformation History,

Ashgate, Aldershot, 2004, pp. xv+345)

(京都大学大学院文学部研究科博士後期課程)